

明末儒学の展開 : 幕末の朱王学

岡田, 武彦

<https://doi.org/10.15017/18037>

出版情報 : 中国哲学論集. 2, pp. 1-23, 1976-10-01. 九州大学中国哲学研究会
バージョン :
権利関係 :

明末儒学の展開

―幕末の朱王学―

岡田武彦

(一)

王陽明の門人王竜谿のいうところによれば、陽明が晩年に提唱した致良知説については、当時すでに帰寂説・修証説・已発説・現成説・体用説・終始説の六つの学説があり、竜谿はそれぞれについて簡明にその特質を述べている。(王竜谿全集巻一、語録、撫州擬峴台會語)だが概括すれば王門は次の三派に分れたと見なしてよからう。即ち現成派 (Existentialist School) ・帰寂派 (Quietist School) ・修証派 (Cultivation School) がそれである。現成派は左派 (Left School) であり、帰寂派は右派 (Right School) であり、修証派は正統派 (Orthodox School) である。現成説は陽明の門人、王竜谿・王心齋などの説である。竜谿は陽明のいう良知を現成的なものとして、専ら本体上に工夫を用い、工夫の積累や効験を要とする立場を誤りとして、直下に有即無の現成の体に悟入することを学の本とした。いわば漸修の弊を痛感して頓悟のみを絶対としたのである。これは元來陽明が上根にのみ許容した教法であったが、竜谿はそれをもって根の上下を問わず、すべての人に通ずる絶対唯一の手法であるとした。ただ竜谿のいうような懸崖撒手、一指も染め得ない不犯手の直悟は、ややもすれば虚見に亘り、見解に陥り、光景を弄するに至る嫌いが無いでもないのであるが、竜谿にあっては、それは翼なくして飛び足なくして走るような、工夫を超えた工夫ではあったけれども、それなりに悟を實にする苦心が払われている。心齋も当下即是、当下即現成として、また同じく直下の悟入を事としたが、心齋の場合は践履と実事を重んじ、且つその教法には禅のような機鋒を弄するところがないでもなかったもので、その現成説は易簡直截であった。

心齋の学は羅近溪に伝わり、近溪から周海門に伝わったが、それと共に現成説は闊略膚浅になった。近溪は、陸門の楊慈湖のような、有を無に摂する悟、即ち端本澄静を宗とする悟を非として、竜谿のような、無を有に摂する悟、

即ち円通を宗とする悟を要としてこれを求め、そのために直下の承当、一切放下の要を痛論したが、良知の現成を説くにあたって「赤子の心」を掲げてこれを述べ、また当下の信を強調してこれを透悟の要とした。近溪は立談瞬目の間に人を悟入せしめる手法に長じていた。ただその学、粗大無統で、同じく現成の良知を説いたが、竜谿に比すれば切磋を欠き、知解に任じ、意見に陥るところがないでもなかった。しかし晩年には篤く実学を修め、万物を一体とする心の生機を孝弟慈とその推開とに求め、而も六経語孟の教えはすべてここに会帰するものとした。近溪によれば、これは朱子や陽明さえ未だ達し得なかつたところであると。近溪の実学も天台に至って一層真切なものとなった。天台も近溪と同じく心の生機を重んじたが、修証派の鄒東廓に私淑したからでもあろうか、仏老の陷空、李卓吾一派の知見浮氣、猖狂自恣の弊を痛感して、人倫実事に生機の帰宿を求め、却って竜谿の通悟を非とするに至っている。故に庸言庸行、反身循理、或いは職分を尽くすをもって学の要とし、これらを尽くすと尽くさざるところに儒仏の別があると考へた。ただ一面心齋派の安易な学風を受用していたので、その実学も平浅に墮し、本源上において清楚でないところがないでもなかった。

海門も、近溪と同じく対言の際人を直下に悟入させる妙手であった。陽明は晩年四句宗旨を掲げて門人に学の宗旨を示したが、その解釈については、周知のように王竜谿と錢緒山との間に意見の相違があり、竜谿はいわゆる無善説（四無説）を唱え、緒山は有善説（四有説）を唱えた。海門は竜谿の無善説を信奉してその要を痛論し、当時それに対し、有善説を唱えてこれに批判を加えた湛門派の許敬庵と論争した。海門によれば、無善上の用功、即ち本体上の工夫は、根の上下に通ずるもので、これが陽明の四句宗旨の本意であり、また聖学の本旨である。故にもし有善を掲げてこれに執するならば、相に着し私に陥るを免れない。有善説なるものはむしろ方便門であると。明末の思想界には無善説が流行したが、蓋しそれは海門の力に負うところが多い。海門の現成説における他の特徴は、自我の現成を強調し、自我をもって宇宙の実在と考へたばかりでなく、仁義礼智もこの自我の題目に外ならぬとして、現成の自我の直信と、その直下の自知自得の要を説き、その間一刻の擬議も許さなかつたことであろう。

現成派の亜流には狂者流ともいふべき一派があった。彼等は赤手をもって能く竜蛇を搏つ徒輩であったが、意気を尊び、氣骨に任じ、任俠を事とし、名教綱紀や格式道理を拘束としてこれを嫌い、用功を障道としてこれを排する風

があった。何心隱（梁汝元）と李卓吾はこの派の尤なるものである。心隱は意氣を尊び、師弟友朋の道を重んじた。心隱によれば、意氣も大なるものは天地の道を成し、師弟友朋の道もこれによって貫かれ、これによって天下の英才を育成してこれを上の用に供すれば、始めて天道の宗主となることができる。故に心隱には事功術策を重んずる風があった。そして陰符経にいう「殺機」の秘義さえ把握しているところがないでもなかった。しかし心齋の実学の旨を体し、小規模ながら革新的な事業を興し、共和的社会を建設している。このように心隱は革新的思想家であったので、当路とは相容れず、これに抗するところがあつたので、当路の弾圧を受けたが、自らは偽学をもって罪せられた朱子に擬せられることを望んだ。

卓吾は林兆恩と同じく儒道仏三教の一致を唱えたが、竜谿に私淑して竜谿を三教の宗師として仰いだ。卓吾は虚文浮理を排して実事実用を尊び、民衆の素朴な要求、自然の性情を重んじ、いわゆる道学者の倫理主義、教条主義を痛斥し、いわゆる道徳倫理、名教節義に対しては、人間の自由を束縛するものとしてこれを嫌悪した。卓吾は「童心」を掲げ、これが心の体であり、これに任ずることが人間の本性に従うことだとした。卓吾はまた男女の平等、言論の自由を唱えたが、特に道学者に対しては強い反感を抱き、彼等の伝統的な評価をけなし、道学者ぶつた当時の為政者の面皮を剥ぎ、時世に対する暴怒に任じて人目を憚らぬ放埒な行いをなし、自らは肯えて狂狷異端をもってこれに任じた。伝えるところでは「酒色財氣、一切菩提の路を礙げず」といったという。もつてその学風を察することができよう。学者の中には卓吾の心の正直さを認めてこれを高く評価するものもないではなかったが、卓吾の言動には怪異奇行が多かつたので、世の識者は、卓吾をもつて任情恣意、猖狂無忌憚で、世の名教を破壊するものとしてこれを非難した。しかし卓吾の現成説は時代の風潮に適合するところがあつたので、大いに世に流行したが、それだけにまた弊害も著しかった。

帰寂説は、陽明の門人聶雙江に始まり、羅念庵・劉向峰を経て万思默・王塘南に至るやいよいよ透徹したものとつた。雙江は陽明の良知についての根本枝葉論に本づき、良知を虚寂の体と感応の用とに分け、体を立てて自ら用を導く、いわゆる立体達用が陽明のいう良知説の本旨で、これによれば発用が人為按排、私意放恣から脱して、本体の自然に本づくものとなるとして帰寂説を唱えた。このような帰寂説も、宋学を志向する傾向があり、従つて王学の展

開の方向に逆行するところがないので、王門の諸士から烈しい非難を受けたが、羅念庵、劉西峰から信奉せられた。しかし念庵は雙江の帰寂説には静寂に偏する弊を免れ難いところがあるとし、「知止」を掲げてこれを救おうとした。これも要するに雙江のいう虚寂が、本来感寂を貫くものであることを述べようとしたからに外ならなかったが、修証・現成の二派、なかならず現成派の流弊が著しいのを見て念庵は、結局収攝保聚、時々収斂する工夫を要として帰寂を説いた。ただ雙江も念庵も、陽明のいう良知説の本旨は、晩年の説よりも、主静を説いた中年の説に示されているとし、伝習録においても、陽明の中年の言行を記した上巻を重視した。両峰は良知の虚体を生々のものとして生機を重んじた。帰寂説も念庵の門人、万思黙、両峰の門人、王塘南に至ってまた新たに進展した。思黙は静かに心を収攝して自心を黙識するの要を説いたが、その学、概ね塘南と同調であり、塘南は主静収斂を基調とする透悟を宗としたが、それは感に即して感を超え、寂に即して寂を超え、生機に即して生機を超えた、有無雙泯、悟修両絶のもので、それは心性とか透悟とかいう語を加えることさえ剩語となるほど透徹したものであったという。陽明は晩年良知説から万物一体を精論したが、蓋しこれをよく紹述したのは帰寂派であろう。

現成・帰寂の二派には王学の両面を開発した功績はあったが、それだけに偏処も免れ難く、動に流れてその本旨に遠ざかったり、静に淪んでその発展の方向に逆ったりする傾向がないでもなかった。その間にあって、王学の真精神を体してこの二派の流弊を矯めるに務め、且つ王学に対する朱子学者の非難にもよく対処して王学の真伝を純守しようとしたのが、陽明の門人、錢緒山・鄒東廓・歐陽南野などの修証派である。

陽明の愛弟子に若くして世を去った徐横山がいたが、横山もまた修証派の一人といつてよからう。横山は陽明の晩年の円熟した学説、即ち致良知説に接する機会はなかったが、身心に切至な実地の工夫を用いた真贋な学者であった。緒山は前述のように、有善説を提げて工夫上に本体を修証するの要を説き、無善説を主張する童谿に相對した学者であった。緒山は、陽明のいう良知は誠意によって始めて致されるもので、これが陽明の本旨に契する所以であるとし、この立場から、世に良知を説くものが、専ら良知を掲げて或いは寂を説き或いは悟を説くのを誤りとした。緒山によれば、それは恰も門に入らずに宗廟を見ようとすることに似ていると。

東廓は陽明の主旨を体して本体と工夫の合一なる所以をよく説いたけれども、専ら本体上の工夫に任じて猖狂に陥

つた現成派亜流の弊害を見て、工夫上に本体を修証することに力を用いた。東廓が要とした工夫は、忠信・遷善改過・戒懼などの実地の工夫であったが、なお、陽明が、良知といえば説くに及ばぬとした宋儒の敬をもこれを工夫としてその要を説いた。また現成派亜流に、専ら心に依存して天理を軽視する傾向があるのを見て、良知が即ち天理であることを強調し、従ってまた心を説くにも性を志向する傾向があった。その結果東廓は宋の周濂溪・張横渠・程明道・程伊川・朱晦庵や明の薛文清・吳康斎・陳白沙・羅一峰・湛甘泉の学をもって王学と同調としたのである。南野も東廓と同じ傾向の学者で、本体と工夫と効験とを分離することも、またこれを混同一視することも誤りであるとしたが、現成派亜流の弊に鑑み、結局工夫に重点をおいた。南野が戒懼を説き、また毋自欺・自慊の要を説いたのはそのためである。一般に修証派の儒者は、陽明の本体工夫合一の主旨をよく理解して、本体または工夫のいずれかに偏することを非としたけれども、時弊を慮って、小心・慎独・戒懼・洗心去欲・毋自欺・反躬力行・遷善改過などの、反省的実地の工夫を切要とし、むしろ悟よりも修に力を注ぐ傾向があった。

東廓の門人に胡廬山と李見羅がいたが、この二人は特に実地の工夫を切論して、現成派亜流の猖狂、禅家の虚見の弊を救うに力を竭した。廬山は心の覚を要とし、王陽明・陸象山・程明道の心学を奉じたが、心性を掲げるよりもそれを尽くすことが必要であるとし、それも德行経綸などの実地の処にこれを求めた。見羅は東廓の性を重んずる立場を一步推し進め、心と性とを峻別して性宗の学を掲げ、心宗の説を痛斥した。その結果陽明の心学は固よりのこと、朱子の学も心宗の学であるといつてこれに批判を加えるに至った。見羅はこのように性宗の学を説いたが、工夫は実地を旨とし、大学の「知止」と「修身」とを透性として止修雙行の要を述べた。

以上王門三派の思想の要旨を概略説明したが、この中、現成派だけが明末の社会を風靡した。それはこの派の思想がよく時代の風潮に適合し、宋以来の理学の趨勢、王学の展開の方向に合致するところがあったからであろう。現成派の思想も末流になるに及んで、益々易簡直截となり、益々普及して、目に一丁字のない無知蒙昧な農工商賈にも流行していった。またこの派の儒者も自ら庶民の教化に力を竭し、それは都市だけではなく地方の村落にも及んだが、一村が終れば次の一村に及ぶという有様であった。しかし現成派の亜流は、粗浅安易な自然の性情に任じて猖狂自恣となり、倫理道德を蔑視して著しく世の綱紀を敗る弊害を生ずるに至ったので、帰寂・修証の二派だけではなく、湛

門・東林の新朱子学派、劉念台などの新王学派、その他批判派復古派も同様にこれが矯救に力を竭した。

湛甘泉と王陽明は講友の間柄で、相共に体認の学を提げて聖学の復興につとめ、それによって朱子学亜流の弊を救うに努力したが、晩年に至って些か学宗を異にし、両家互に対峙するに至った。しかし両家の門人は互に相出入して学を講じた。ただ湛門派は朱子学派に属するもので、王学派とは一線を画するであろう。湛門派の許敬庵や馮少墟は王学を通過した新朱子学を提げて現成派亜流の弊害の匡正につとめた。敬庵は程朱よりも性の客観性と純粹性とを切論し、克己という厳苦な実地の工夫を旨とした。しかし陽明のいう本体工夫合一の主旨はこれをよく理解し、また陽明が掲げた致良知説や四句宗旨についても、これは天理に本づき性善を宗とするものであると認めていた。ただ現成派が克治すべき己私はないと認めて、己我の現成を強信して猖狂に陥ったので、この弊を救うために性を切論し、克己の要を述べ、且つこの流弊の根源となっている竜谿の無善説に批判を加えて有善説を唱えたのである。敬庵は、先儒の学に対しては門戸の見を立てるのを非とし、且つ弁論よりも実修に務めるよう求めた。しかし門人、少墟に至るや、異端異学を弁難しなければ、明道覚心も不可能であるといつて、却つて講論に力を用いた。少墟は理の有無をもって儒仏を明弁し、天理と人欲は両立し得ないから、理を無にする仏氏の空無の論は、結局人欲を縦にし、世俗の名利に投じてその弁を伸べるに過ぎぬといつてこれを痛斥した。このように理の切要を論じた少墟は、性善説を復興して、現成派の無善無惡説（無善説）の弁難に力を竭し、現成派の無善無惡説は仏氏の改頭換面であると断じた。少墟によれば、このような説が流行したのは、本体と工夫の弁析が明白でないために本体工夫共に失ったからである。よつて本体と工夫それぞれについてその特質を明らかにし、それによつて両者が本来渾然一体のものであることを解明した。少墟は結局静処において本体に透徹し、而る後動処において時々点検することを学の要としたが、概観すれば、少墟の学は些か議論に走つて体認の真切さに欠ける嫌がないでもなかつた。

東林派も湛門派と同じく新朱子学派に属するが、その巨頭は顧涇陽と高景逸である。彼等は理を直ちに心に即してこれを求める陸王の心学を非とし、性を理としてこれを厳正に存立する朱子の性学を信奉した。彼等は時弊を痛感し、それを救うために清議をなし、是非の弁を明らかにし、気節事功の要を説いたが、ただその亜流の中に血気に任じて清議を大言し、門戸を立てて世と抗し、時政を批判して遂に申韓のような刻薄に陥るものが出たので、もともと講学

の名であつた東林も、そのために党名と見なされるようになった。しかし顧・高は門戸を立てて人と争うことを強く戒め、専ら性と天理の体認躬行、静定自得を旨とし、さもなければその講議是非も、結局論争拘執、相对執私に任ずるの弊に陥ると述べて、東林が本来講学の名であることを明らかにするに努めた。東林の朱子学は、涇陽の学が王学に源を発した関係もあつて、陸王学を通過して出て来た新傾向のものであつたが、この傾向は景逸にも流れている。故に二人は、相互に朱子学を信奉して、陸王学には批判的であつたが、陰に陽にこれを撰取してわが学を講じている跡が見受けられる。従つて両学を折衷してその長を取り短を捨てる態度を持するところがなかつた。これを朱子学の立場からいえば、彼等は明末の陳清瀾や清初の張武承或いは呂晚村などのように、朱子と陸王を明弁して朱子を固守しようとしたわけではなく、朱子に対しても批判すべきところがあれば忌憚なく批判を加えつつその新生面を開発していったのである。故に純乎として朱子学を堅守しようとした清初の朱子学者、陸稼書・張楊園・陸稼亭などから批判を受けるところがあつた。顧・高は先ず學術をもつて時世を救うことを念願とした。彼等は天理の嚴存を説き性善説を復興して、当時流行していた現成派の無善無惡説の弁難に力を竭し、また、当下といつてもよく本体工夫上に力を用いねばその停当着落は期し難いといつて現成派の当下即是論、当下即現成論に批判を加えた。彼等が格物窮理の要を切論したのも同じ主旨から出たものである。しかし彼等のいう格物窮理は、これを内的過程としてわが身心上に真切な工夫を加え、理の静、性の静に深く沈潜していくことを要とした。故に格物窮理といつても必ずしも朱子の旧説に固執せず、心と理、知と行、本体と工夫の妙結する精微のところを探り、主静体認による深造自得を旨とした。この説は涇陽から景逸に及んで一層精切なものとなり、格物窮理が主静体認を本とする渾一の工夫であることがそれによつていよいよ明白になった。彼等によれば、これによつて現成派亜流の猖狂の弊ばかりでなく、朱子学亜流の支離の弊をも救われると。要するに張楊園もいうように、東林は静悟の二字をもつて工夫の入門としたといつてよからう。故に彼等が周濂溪・羅豫章・李延平・陳白沙・羅念庵など、宋明の主静派に同情的であつたのも理由のないことではない。

明末の思想界も、最後に敬庵の門人、劉念台が出て一段と光輝を加えるに至つた。念台も朱王両学に批判を加えて

いるけれども、一面またこれを折衷する面もあつた。結局、後述によつて明らかかなように、念台は朱子学を通過した

新王学者ということができよう。何故なら、念台は王学の中に蘊まれている血脈生命を開発してわが学を形成していったからである。血脈生命を重んじた念台は、性を掲げてこれを題目となすことを嫌って、これを心体として説いた。それは、さもなければ性は血脈生命を失って支離空蕩に陥ると考えたからである。念台がいう心体とは心の存主であるが、念台によれば、それは心を主宰する一物ではなく心の主宰であり、それ故に主宰即流行となるのである。従ってそれは有無合一、有無無間の、至微の枢紐であると。故にそれはまた未発であつて而も存発一機のものである。念台はこの心体、即ち心の存主、心の主宰をもつて、善を好み悪を惡む、いわゆる好悪の意に求めた。念台は、このよくな意を心体とすることによつて、心は定向を保持して、無の虚寂に淪み有の任肆に流れる弊を脱し、一源無間の幾微を得て眞の主宰としての面目を保つことができる。このように念台が従来已発とされた意を未発としてこれを心体と見なすに至つたのは、心の血脈生命を重んじてそれが支離外馳となることを極力憂えたからに外ならない。意を蔽う仏老の陰翳を払拭することができるとした。念台によれば、楊慈湖・程伊川・朱晦庵・王陽明もこの点が明らかでなかつたために、結局念頭が起滅するところに実地を求めて、遂に支離空蕩に陥るを免れなかつたのである。意を心体とした念台が、誠意をもつて学問の符としたことはいうまでもあるまい。誠とは念台によれば、陽明が知の真切篤実とした行いの別名で、ここに工夫の主意があるのである。念台はかつて慎独を重視して厳格な反省の工夫を用いた。しかしその慎独説も、後には内容に変化を生じたが、誠意を学の宗旨とするに至つてからは、古人の慎独の学は意根上に尋討して始めて得られるとし、慎独も誠意を主脳としなければ、仏の陷空となる惧れがあると考えられた。また大学も誠意を主脳として始めて首尾一貫した渾一のものとなるのであり、さもなくして誠意以外のものを主脳とすれば、その渾一性が失われて支離に陥るとした。故に朱子の補伝を非として、朱子が敬をもつてこれを補おうとしたのは贅であるとし、また陽明が主意を良知に求めたのは穿鑿に近く、見羅が正修をもつて主脳としたのは支離に近い。これらは皆大学の誠意の旨に通ぜぬために起つたのであると述べた。蓋し念台の誠意説は、陽明の本体工夫合一の主旨をよく発明したのもといえるが、実は陽明の、好悪の意についての論や、知行合一説の、真髓微に入るところを発明して得たものであつた。

明末の社会は綱紀の紊乱が甚だしかったが、その責めは現成派亜流に帰すべきところが多い。当時現成説は、儒学だけでなく禅学にも流行し、両者が渾然一体となって猖狂の弊を生じた。智旭は、当時禅者が狂解を自負して徳行を敗り名檢を喪つたのを見てこれを慨嘆している。この状況を見た儒者の中には、その責めは陸王にあるとして、これを鋭く批判したものがいた。陳清瀾はその代表的な儒者であろう。清瀾のこの批判論は、明末清初の朱子学の興起に大きな影響を及ぼした。清瀾は、朱陸を性心両学の立場から峻別し、心学を事とするものはすべて禅だときめつけ、且つ民族主義的見地から陸王一派の心学を痛斥した。しかし明末の儒者の中には、陸王だけでなく、程朱にも批判を加えたものもいた。呉蘇原・郝楚望などが即ちそれである。彼等は古学に復帰して氣を主とする理氣一元論、性氣一元論を唱え、その立場から宋明の理学を非難して、それをもって仏老の空寂に陥るものとした。このような復古派の思想は、わが江戸時代の儒者に受用せられたことは周知の通りである。(以上詳細については拙著「王陽明と明末の儒学」を参照されたい)

以上明末の儒学について、主として陽明学と朱子学を中心にその概要を述べたが、江戸時代の儒学はこれを摂取し受用して展開を遂げている。しかしそこには日本的なものがあり、また日本の伝統思想との折衷も行なわれ、それによってまた国体に対する自覚も生じた。以下幕末の陽明学と朱子学の概要を述べ、明末の儒学がどのように摂取され受用されたかを明らかにしたいと思う。

(一)

江戸幕府の教学の宗家であった林家も、初代の羅山、二代の鶯峰、三代の鳳岡までは、名実ともに一代の宗師として天下に君臨したが、羅山と同門の木下順庵門下に大儒が輩出して、江戸において林門に対抗する勢力を保持し、京畿には姚江を宗とする中江藤樹の江西派、古義学を唱えた伊藤仁斎の堀河派、林門の朱子学に対抗して別派の朱子学を唱えた山崎闇斎の崎門派が興起して、互に覇を争い、また地方においても多くの大儒が出たので、林門の存在は次第に影が薄くなっていった。江戸文化も文禄・宝永(一六八八—一七一〇)頃になると、漸く爛熟の域に達したが、それに続く享保の初年(一七一六—)荻生徂徠が出るに及んで、江戸において護園社を結び、古文辞学・復古学を唱

えた。この派は当時の世相、時代の反動精神及び江戸人の気風に投合するところがあつたので頼みに一世を風靡し、安永・天明（一七七二—一七八八）頃には隆盛の極に達した。この間にまた折衷・独立・古注・考証の各家が出ておのおの子弟に教授したが、護園派の鼓動により文人詩人も、互に門戸を張って新奇を競い、自説を唱えて師法の紹述を厭い、傲然として自ら師儒をもつて任じ、釣名売名の徒輩が世に横行した。そのために伝統的な京学の醇篤懇実の風が失せて猖狂自恣となつたが、その風潮は明末の現成派惡流のそれと酷似している。

このように各派が興起して互に覇を争つたので、当時の思想界は沈滞常套を脱して活気を呈するに至つたが、護園派の流行によって幕府の教学が破壊せられ、世の綱紀が頽廢し、思想界は騒然となつた。これを憂慮した幕府は寛政二年（一七九〇）異学の禁令を發布し、朱子学の復興、教学の刷新、學術思想の統一に銳意努力したが、当時は、官学としての朱子学を偏固に掲挙するだけでは、もはや事態を收拾することができない状況にあつた。やがて述斎が幕府に起用されて林家の宗主となつたが、述斎は幼少の頃の講友、佐藤一斎を起用し、相共に徳川の始祖、家康から篤く崇信された藤原惺窩に依違し、朱子学を標榜しても、偏狭な門戸の見を排して包括的な態度をもつて斯学の復興につとめた。殊に一斎は、惺窩だけでなく、林家もその始めは一家に拘泥しなかつたと述べ、崎門の偏狭を非難した。述斎の没後、一斎は朱陸同旨の説を唱えたが、元来一斎は陽朱陰陸といわれた学者であつた。その門下から多くの俊秀が輩出したが、彼等はいく列藩に仕えて活躍したので、一斎は当時一世の泰斗として上下から景仰欽慕せられた。思想家として優れた幕末の陽明学者・朱子学者を挙げれば、林良斎・吉村秋陽・山田方谷・春田潜庵・池田草庵・東沢瀉などの陽明学者がおり、大橋訥庵・楠本端山・碩水 などがいる。この中の多くは一斎の門人、またはその交友で、良斎だけが太塩中斎の門人である。彼等はお互交友の門柄である。この中には方谷のように経世家として世に名を馳せたものや、訥庵や潜庵・沢瀉のように勤王家として名を知られたものもおり、また端山のように藩政の要路にあつて維新回天の業に参加したものもおり、また良斎・草庵などのように野にあつて専ら講学を任じたものもいたが、概していえば、彼等は大義清議を張目大言したり、意気に激し、客気勝心に任じ、功業氣節に志を馳せて世を革新しようとしてたり、尊王攘夷を標榜し、国体の護持を力説したりして、国事に狂奔するような、いわば行動派に属する学者とも異つて、宋明の心性の学を講じて道を明らかにすることをわが使命、学者の第一義とし、それによつて

世の風教を正し国難に対処しようとした。彼等によれば、右のような行動も深密な心術、真切な実功を用いぬ限り、外、道義に名を仮り内、権詐功利に陥るを免れず、結局国家の元気を傷い世の綱紀を敗り、却って生民を塗炭の苦しみに陥れるようになる。〔楠本碩水、池田草庵宛書簡。潜庵遺稿巻二、与山本清磯。同再与山本清磯書。方谷遺稿巻中、書王文成公全集後贈河井生等〕幕末の朱子学者、並木栗水が次に掲げるように英雄豪傑の談を痛斥した理由はここにあったのである。

そもそも近世斯学陵夷す。学者皆六經四書をもつて無用迂濶となし、歴史詞章をもつて有用達才となし、聖賢君子となるを庶幾せずして、願はくは英雄豪傑とならんと欲すと。ここをもつて人心壞乱し風俗頹靡し、邪説の説また従ひてこれに乗ず。然り而して、天下の敗乱せざるものは幸ひなり。それ聖賢の学講ずれば、すなはち忠信礼讓の風日に興らん。忠信礼讓の風興りて邦乱るるものは未だこれあらざるなり。

英雄豪傑の談盛んなれば、すなはち智弁桀黠の士出でて国治まるるものは未だこれあらざるなり。學術の世道に關係するやかかくのごとし。戒しめざるべけんや。僅竊かに謂へらく、「近世学風の一変、その源は山陽頼氏に出で、而して藤田東湖・佐久間象山・藤森弘庵の徒これを鼓舞す。彼皆いはゆる豪傑の士なり。故にその流弊海内を風靡す。その禍最も烈し」と。(朱王合編、巻四、与東沢瀉書)

右に掲げた幕末の陽明学者・朱子学者は一般に勤王の思想を持っていただけども、当時の勤王討幕のいわゆる行動派に対しては批判的であった。故に例えば訥庵や潜庵が勤王討幕のために奔走したとき、かねてよりこの二人と親交のあった秋陽・草庵・端山・碩水などは、この二人の行動に疑念を抱き、中にはそれをもつて講学を捨てて功利賜に墮したといつてこれを非難したのもいた。(吉村秋陽、池田草庵宛書簡)これら幕末の学者が、時弊を救い国難に対処するに講学明道を第一義とした態度は、まさに明末の、王門正統派(修証派)や新朱子学派・新陽明学派の態度と相通する。

(三)

右に述べた幕末の学者は、或いは陽明学を宗とし或いは朱子学を宗としたけれども、いずれも真切な反省的な実地

の工夫と縝密な体認自得を要とした。このような学風は従来もないではなかったが、彼等に至ってそれが一層深潜縝密、精切深淵なものとなっている。一世の泰斗と仰がれた一斎も、

人徒らに目をもって字あるの書を読む。故に字に局せられて通透するを得ず。まさに心をもって字なきの書を読むべし。乃ち洞として自得あり（朱王合編卷一、一斎行狀）

といい、また、

吾読書静坐を把って打成一片ならんことを欲す（同）

と述べて、真切な実功を責めたけれども、その縝密精功にいたっては彼等に一步譲らざるを得ないところがあり、彼等から見れば一斎の学も純正を欠いて博雜に墮し、体認自得も些か平浅に陥るを免れないであろう。故に彼等は概して一斎の學術思想については触れることを避け、お互同志書簡を往復して輔仁に励み学を磨いたが、中には門人でありながら師の行動に批判を加えたものもあり、（大橋訥庵、楠本端山宛書簡）また一斎の学には魅力がないことを率直に述べたものもいた。（池田盛之助日記。吉村秋陽、池田草庵宛書簡）何故彼等の学が従来のものよりも体認自得において一層深潜精切なものとなったのであろうか。それは彼等が歴史上かつてなかった国家内外の艱難のさ中に生を享けて、深刻な体験を経たためであることはもちろんだが、同じような時世の中で深い体認を旨とした明末の陽明学や朱子学を真剣に摂取し受用したためでもあろう。彼等は家国の運命、民生の安危をわが心性に会帰し、心性の学の盛衰をもって一国の命脈に関わる一大事と考えた。故に碩水は草庵宛の書簡の中で、

正学之盛衰ハ一国の命脈に懸り、中々小事に而無御座候。吾人今日に相当り、此外心を尽し候処無御座候と述べたのである。それだけに彼等が宗とした心性の学は生死を賭けたものであった。以上述べた当時の学者の気持は次に掲げる草庵の一文が遺憾なくこれを物語るであろう。

ああ茫茫たる宇宙、議論是非、何れの時にして定まらん。安危利病、何れの日にして明らかならん。紛々擾々、知らず何れの処か終にこれ脱駕の地ぞ。願ふところはすなはち吾輩竊かにこの学を下に講じ、奮発勉励、斃れて後止まん。幸ひにもつてこの一種子を天壤の間に存するを得ば、すなはち庶幾はくは嘉苗待ちて殖せん。或はもつて世道人心に裨するあらんか、これはこれ吾人の深く心に期すところにして、まさに手を藉きてもつて天地神明に謝せ

んとするものなり。(青谿書院全集、第二編上、草庵文集下、与春日潜庵書)

(四)

右に挙げた幕末の学者は、道学を掲げて或いは心性の学を説き、或いは性命の学を述べたが、それにまた多聞博識、訓詁泛濫の弊や、議論弁析、考索知解の弊に陥ることを極力戒めた。例えば良斎は陽明学を奉じて読書が玩物喪志となることを戒め、また朱子も良知の識取を事として多聞博覧を嫌ったと述べた。故に明末の陳清瀾や清初の陸稼書、朱子学を批判して、それは真の朱子学ではないといい、また心性の学の訓詁を排し、その立場から陳北溪や饒雙峰の朱子学を非難して、彼等は朱子学を訓詁に陥れたといった元の呉草廬の学を高く評価した。(会稽)良斎はまた、学には分析と綜合の二端があるが、いずれも弊害がある。しかし「今日は分析の弊」(池田草庵宛書簡)といつて、特に分析の弊を指摘した。

秋陽は、読書講解は学の入所、体験躬行は学の究竟と述べ、当世の学者が入所を究竟とするの誤りを指摘し、世に経解の人は多いが、文字ばかりで真の実功は覚束ないといつて慨嘆した。(吉村秋陽、読我書樓文章、隨筆七十五條)故に訓詁の精を求めるよりも、大略意味が明らかであれば、着実に体当し、実修実悟を要しなければならぬと述べたのである。(吉村秋陽、読我書樓遺稿、附存、語録)この立場から崎門派の金子霜山の朱子学を批判して、文字は精究無比だが実功が足らぬと述べている。(楠本端山宛書簡)故にまた泛濫をもって學術の弊とし、便捷巧佞の言論、議論弁析、記誦聞見、辭賦操觚に任ずるを非としたことはいうまでもあるまい。(読我書樓文章、与大塩子起書)従つて秋陽が、弁才に長けた同門の訥庵や、文才に長け議論を好んで輕佻な行い、淺薄な体認を免れなかつた当時の江戸の朱子学者安積良斎を非難したのも、理由のないことではない。(池田草庵宛書簡)

潜庵も多読の害を指摘し、仏老の虚無寂滅の論と共に儒者の口耳の学、章句訓詁の見を排して心身実践の要を説いた。(潜庵遺稿卷二、与山本清磯書。同一、立志説)潜庵は当時の学者が泛々の読書に任じて反觀内省、近裏着の工夫を用いぬのを慨嘆して、

道学の人と申して、大要談話の事に日を送り候様之姿に相見、扨々学者は廢し申居事と存候(池田草庵宛書簡)

といっている。故に窮理学に精通し博識をもって聞えた九州の帆足万里を許して、

一向名望の様子と者違、甚碌々之事に御座候。大抵少し読書の博と申事迄に而、識見浅陋之様子、可笑事之由承り候。当時之名家如此、実に可憐次第に御座候（同）

といったのである。また当時古注学をもって江戸で名を馳せていた安井息軒に対しても、「ただ文字のみ」といってこれを評した。（同）潜庵は門戸を張り虚声を逐う当時の江戸の儒風を忌み嫌った。（同）

草庵も博搜を非とし自得体認の要を説いた。（青谿書院全集第一編肄業余稿）故に読書の功は廢してはならぬとは述べたが、（林良斎宛書簡）「今日我の学、天下の事物の未だ通知せざるを患へずして、ただこの心の未だその力を得ざるを患ふ」（青谿書院全集第二編上、草庵文集、自警）と述べ、経解においても元来人々の胸中にある聖賢の意味気象をわが胸中に体透体認するようにしなければならぬとした。（青谿書院全集第一編、肄業余稿）体認自得を要とした草庵は従って高妙の論よりも平実で咀嚼に勝える語を喜んだ。故に議論の場合でも標榜を忌み圭角を嫌ったのである。（楠本碩水宛書簡）草庵が胡致堂の「読史管見」や訥庵の「關邪小言」の論、或いは水戸学に対して批判的であったのも、ここに理由があったのである。（同）草庵がまた門戸の見を排したのも当然であろう。

以上幕末の陽明学者の所論について述べたが、朱子学者の説も同工異曲である。訥庵は弁才に長けていたが、それでも、

性理之学は不貴多読貴精読候事故、洛閩四子之書に就き枢要之处を択候而、数十百遍反復熟誦、更に体験之功を下候て、思之々々致候はば、脱然如大寐之得醒時節有之候而、道体を看徹致候事相違無之候（楠本端山宛書簡）
といった。訥庵の門人並木栗水は博学強識を非とし、それは結局玩物喪志に陥ると述べた。（楠本碩水宛書簡）栗水は伊藤東涯の「太極図説管見」を評して、程朱の書をよく考索しているが、「道理」の二字に至っては発明がないと
いって考索知解の害を述べた。（同）

朱子のいわゆる「本領一段の工夫」を要とした崎門派の端山は「約にして深く踏み込む」ことを要とし、（吉村秋陽、楠本端山宛書簡）当世の朱子学を評して、

世上之朱学を唱候者、訓詁上には走り仕、一箇短刀直入之実功無之候（池田草庵宛書簡）

と述べ、その弟碩水は心の自得を要として、宋の真西山の「心経」、明の程篁墩の「心経付註」を推賞したが、明の程篁墩・丘瓊山の名が「理学宗伝」や「明儒学案」の中に列せられなかった理由に論及して、それは彼等の学がただ博識のみに止って心得が足らなかつたからであると述べた。(碩水遺書一〇、随得録三)

幕末の陽明学者だけでなく朱子学者も右のように多聞博識、訓詁泛濫の弊を述べ、議論弁析、考索知解の害を説いたのは何故か。彼等によれば、専らこれに任ずれば捕風把影、懸空恍惚の弊に陥るか、さもなければ利害得喪の間、計較の心を生じて功利權詐に陥り、霸学のために赤幟を樹てるを免れないからであると。故に秋陽は自警三条を掲げて、

訓詁の陋に落ちず、門戸の見を立てず、知解の精に頼らず(詵我書樓遺稿、付存、語録)
と述べたのである。この三条は右に述べた論旨を簡切に明示したものと云ってよからう。以下幕末の陽明学者、朱子学者の学宗を述べ、彼等がどのように明末の儒学を摂取し受用したかを概略説明することとしよう。

(五)

良斎の学は無我をもって宗とし慎独を功夫とする。(青谿書院全集第一編、鳴鶴相和集、林良斎、与吉村秋陽書) 故に春日潜庵への書簡の中で、

おもへらく、聖人の聖人たる所以のものは無我のみ。而して吾人の一点の独知は天機の自然にして人力得て与からざれば、すなはちまた無我なり。その有我なるものは乃ち意欲のみ。今意を遣り欲を消し、その本無なるの天に復さんと欲せば他なし、その独を慎しむにあるのみと(同、与春日潜庵書)

と述べたのである。良斎は陽明学を奉じたが、師の大塩中斎や錢緒山の説に従って良知の体をもって太虚とした。(再寄篤山近藤先生復論學術書) 良斎によれば、人々がわが中なる虚靈の独知に従えば、我欲私意は消尽して無我となる。無我となれば万物一体の生機が自然に生ずる。何故ならば虚にして無我であるのが宇宙の体であり、そこに万物一体の生機があるからであると。故に慎独を要したのである。もちろん良斎のいう慎独は本体即工夫のものであるが、良斎は工夫に重点をおいた。良斎が慎独の工夫として求めたものは静坐収斂による反観内省であった。良斎によ

ればこれがまた虚霊の生機を充養する致良知の工夫であると。(白明軒遺稿、自警録。陋説七条。奉送中斎大教鐸序。再寄篤山近藤先生復論學術書。池田草庵宛書簡) 故に羅豫章・李延平・陳白沙の主静説、聶雙江・羅念庵の帰寂説に心を寄せると共に、劉念台の自訟説を高く評価したのである。良斎はいう、

著実之學問は兎角雙江、念庵之帰に止り候様奉存候。其手を下し候所は、念台之訟過法至極之良法歟と存候(池田草庵宛書簡)

と。特に念台の慎独自訟を信奉し、門人にも「自訟録」を作らせて切に反觀内省を責めた。(同) 良斎は前述のように陽明学者であったが、王門三派の中では帰寂派を尊信した。現成派に対しては、王竜谿や耿天台は一念微に入るところに性命の真機を識取したと云ってその功を認めてはいるけれども、(會藉) 現成派の学者が、氣質に任じ直情徑行となつて陽明の本旨を失し、世人をして陽明の良知説に疑念を抱かしめるに至つた点を指摘してこれに批判を加え、(寄篤山近藤翁。奉復質篤山先生) 結局雙江・念庵の帰寂によらねば光景を弄するに至ると云つてその流弊を述べた。(池田草庵宛書簡) このように良斎は王門の帰寂派や劉念台を尊信したが、また東林の顧涇陽・高景逸、湛門派の許敬庵など、明末の新朱子学にも心を寄せたばかりでなく、「愚謂へらく、程朱陸王は殊途にして同帰、みな聖学なり」(自明軒遺稿、陋説七条) といつて、朱陸・朱王を折衷し、宋明を調停した。(類聚要語、自序及び跋) 故に「朱子も良知の学」といって、陸王の弁難に力を竭した陳情瀾や陸稼書の朱子学を真正の朱子学でないといつて非難し、(會藉) わが国の藤原惺窩や元の呉草廬の朱陸折衷を称賛して、「二子の論、これを羅整庵・陳清瀾・霍渭涯・呂晚村・張楊園・陸稼書輩に比すれば、公正なるを覚ゆるに似たり」と述べたのである。(陋説七条) 良斎の学について付言することは、師、中斎の影響もあつて孝を重視して、(大塩中斎、林良斎宛漢牘) 「一孝万善」といい、孝をもつて天地の経義とし、宋の楊慈湖、元の虞道園、明の羅近溪やわが国の石門心学の重孝思想に心を寄せたことである。(自警録。陋説七条。奉質篤山大教鐸。再寄篤山近藤先生復論學術書) 石門心学については、本朝の儒流を觀るに、江西一派を除くの外、未だ石門の学のごとく親切簡易にして、世教に裨ありとなすものあらざるなり。その著はずところの国字の読書見るべし。然り而して世人往々徒らにその言の近きを見てその旨の遠きを察せず、視てもつて俗学となす、過りといふべし(池田草庵宛書簡)

と述べている。

秋陽は、師、一齋の学の真伝を得てこれを一層精切にした学者で、佐藤門の功臣というべきであろう。秋陽は、「何分にも簡易にて奥妙不測、千古之卓見有之候人は、姚江の外比倫之數様に被存候」(池田草庵宛書簡) といって陽明を篤く尊信し、且つ陽明と念台の学を同調したり、念台の学をもって王学の欠を補うものであるという説を非とし、王門の欠を補うものは修証派の鄒東廓・歐陽南野であり、王門に功があるものは帰寂派の王塘南・万思黙であつて念台ではない。念台は独自の学を樹てた学者であるとした。(読我書樓遺稿卷一、与池田草庵) しかし「意は歛発にして意なき時なきなり。これ王門の正法眼蔵」(読我書樓文章、隨筆七十五条) というから、陽明の「意」についての秋陽の解釈には、意を存主とし未発の中とする念台の誠意説の影響がなかったとはいひ難い。秋陽の「大学騰議」を見ればこの点は一層明らかになるであろう。秋陽は陽明の致良知説における本体工夫一体の主旨をよく理解し、陽明と同じく「致」の要を指摘した。(読我書樓遺稿、付存、語録) それは一つは王竜谿や周海門などの現成派が本体に即する立場に終始して、過高空蕩、猖狂自恣、意見臆度の弊に陥つたのを痛感したからである。(読我書樓遺稿卷一、王文成公伝本序。読我書樓文章、贈飯田) 故に修中の悟が真悟で、修外の悟は猖狂として、頓悟を排した。(読我書樓遺稿、付存、語録) 晩年秋陽は、益々知解の弊を痛感して、性命の高論など空虚の論は一切排除し、學術の弊は身心岐れて二となるにあると述べ、(読我書樓文章、順正書院記) 専ら反躬踐履を旨とするに至つた。故に例えば懲忿窒欲を人生の第一義とし、(読我書樓遺稿、付存、語録) また宋儒の説く敬をもって、用功の会帰するところ、聖人相伝の一滴血であり、反躬実践によって始めてこれが得られると述べ、自反・反身・反己というような切至な反省的工夫を切要とした。(同) 秋陽の学の真切さはこれによって知ることができるが、秋陽がこのような工夫を掲げたのは私利によって道の常が失われることを痛く惧れたからである。秋陽は、これによって真の良知が致され、天則の已むべからざる自然の流行、万物一体の仁の真機が得られると考えた。秋陽はいう、

学者自ら反るのみ。切に物と對をなすべからず。百般の病痛みなこれより生ず。それ物と對せざればすなはち物なし。物なければすなはち物我混同し、その感応の際、ただ一箇の已むを得ざるの心を尽くす。孝はもつて自ら孝と成り、悌はもつて自ら悌と成る。殊更孝を欲し悌を欲するにあらざるなり。日用万變わが操るところは一。自ら反

るとはかくのごとくに過ぎず（同）

と。秋陽は晩年の陽明の善学者といつてよいであろう。このことはまた秋陽が「王学提綱」において、「拔本塞源論」をその冒頭に掲げた一事からでも推測することができよう。秋陽は前述のように、王門の修証派の東廓・南野ばかりでなく、帰寂派の雙江・念庵・塘南・思默も王門を補い王門に功があるとしたけれども、秋陽の思想は修証派に最も近い。秋陽は最初は主静帰寂派の説には賛成でなかったが、晩年に至ってから静坐収斂が学の入門下手のところに功があることを認めるようになった。（林良斎、池田草庵宛書簡。秋陽、草庵宛書簡）秋陽は王学者であったけれども、朱子学を排斥することはせず、むしろ朱王折衷の立場を取った。秋陽によれば、学問の道は去欲存理の反躬踐履にある。朱子の学、入門下手の処は異なるも、この実功を旨とすれば一に帰する。ただわが力量の及ぶところに随つてそのいずれかを選択すればよいのであると。（読我書樓文章、雜著）秋陽はこれが実は陽明の本旨であると考えた。故に陽明学を掲げたけれども、一方においては朱子学を真に理解しよう求めた。秋陽が「四書大全」を翻刻した意図はここにあったのかも知れない。秋陽は、弟子に対しては、朱子の章句集註によって諄々と講説し、陽明の書に至つては、学者が篤く信じて懇請するのぞなければ、妄りに講説しなかつたという。

方谷は、

王氏の学、誠意をもって主となす。致良知は即ち誠意中の事のみ。然れども必ず格物をもってこれに配す。蓋し致良知にあらざればもつて誠意の本体を觀るなし。格物にあらざればもつて誠意の功夫をなすなし。二者並進して意誠なり（方谷遺稿卷上、答人某書）

といい、誠意を致良知の主とし、格物をその実地の功とした。方谷によれば、これによって始めて陽明の致良知が恍洋茫蕩の弊から脱して縝密となるのである。故に専ら致良知を掲げてその簡高に任じ、その実功を用いずしてこれを虚説することは陽明の本旨に悖ると。方谷は当時潜庵が専ら致良知を掲げたのを戒めて、「願はくは再び王氏の書を取り、精にしてまたこれを精にし、誠意の学に従事し……」といった。（同、復春日潜庵）従つて方谷の学は王門の錢緒山に相通ずる。なお方谷は、誠意の実功を用いて心得するところがあれば、周子の主静、程子の持敬、陸子の尊徳性、朱子の道問学、王子の致良知など、各々説は異なるが道は一、即ち殊途同帰であると述べた。（同、答木山三

介書) ただ小蕃といわれた方谷は、事功を要としたので、陳竜川の超脱飛騰の気概に憬がれるところがあったようである。(方谷遺稿卷下、読陳竜川集)

潜庵も秋陽と同じく本体即工夫、工夫即本体、即ち本体と工夫とを一体とするところに王学の真伝があったが、(潜庵遺稿卷三法録、潜庵偶筆) それはただ反観内省、自責反求による自得によって始めて達し得られるとした。故に切己の工夫をなした王門の徐横山をもって陽明の真を伝えたものとし、朱陸両学を調停して実地の工夫をなした呂東萊の学を自得によるものとしてこれを称え、修証派の鄒東廓、帰寂派の聶雙江・羅念庵・劉兩峰をもって陽明の本旨を失わぬものとしたのである。(潜庵遺稿卷二、与岡本経迪書) 性格気象から潜庵は現成派の王心斎に似たところがあるが、潜庵は心斎や竜谿に対しては批判的で、

王門の諸子、竜谿、心斎のごとき、致良知の旨を聞かざるなし。然れども往々弊なき能はず(同、与池田子敬書) といひ、彼等の現成派に、狂肆放蕩、名利に陥溺する流弊があることを指摘した。(同、王心斎全集序) 潜庵は陽明学者であつたけれども、潜庵が最も尊信したものは、王学の蘊を啓いて新王学を樹立し、「人譜」を著わして自訟慎独の功を切論した劉念台であつた。潜庵は始めて「人譜」を読んだ感想を次のように述べている。

戊戌季冬、始めて人譜を読み、爽然として自失し、乃ち予の学の疎なるを知る。(潜庵遺稿卷一、与池田子敬書) 潜庵はこの「人譜」を論じて、

先生(劉念台)の全書四十卷、その言往々姚江の科を闢きてもつて支離恍惚の弊を救ふ。而してその要領を求むれば、乃ちこの篇(人譜)に外ならず(潜庵遺稿卷二、劉戴山人譜序) と述べ、また、

戴山の学、姚江をもつて宗となし、致知をもつて要となし、而して慎独を主となし人譜を作つて学者に授く。而してその用功の精、条分縷晰、一もつてこれを貫く。(潜庵遺稿卷一、与池田子敬書)

といひ、戴山は姚江の粹を得た学者で、戴山の大節も慎独の功熟して良知を致したからであるとした。(同) 潜庵は、特に念台の意念の別論を推賞し、これをもつて千古の卓見、千古の定案、姚江の薪伝であると述べている。(潜庵遺稿卷二、答西江恒河健書。同与忠純書) 陽明は意を所発とし、念台は所存、心の存主、即ち独体としたが、潜庵によ

れば念台のいう意としての独体は陽明のいう未発の中で、陽明の未発の中は大中の真伝、周濂溪の遺意であると。(同、答西江恒河健書) 故に潜庵は念台の学をもって姚江の精粹を得たものとし、王劉の意論は已発未発の別があるにも拘らず、自得すれば断じて同じであるとし、両学を一統とした。(同、答西江恒河健書。同、与忠純書) 潜庵はこの自得の立場から朱陸両可を述べた。(潜庵遺稿卷一、記夢。池田草庵宛書簡)

草庵は、陸王の学は簡易直截、洞然として明快で、よく程朱末学の支離執滞を救ったとし、且つ陸王は専ら本体を論じて工夫を説かぬという非難に対し、陸王は本体だけを説くのではない。専ら本体だけを説くのは末学の弊といつてこれを弁護した。(青谿書院全集第二編上、草庵文集上) しかし陸王には自信過剰、含糊僮侗の弊があり、禅の余習を脱せぬところがあるが、これを救うたものは念台であるとし、(楠本端山宛書簡) 「蓋し程朱二子の後王子を欠くを得ず、王子の後また劉子を欠くを得ず(中略)程朱の学、王子これを救ひ、王子の旨劉子これを補ふといふもまた不可となさざるなり」(草庵文集中、答吉村秋陽書) と述べて念台を尊崇した。草庵も良斎と同じく念台の自訟慎独を奉じ、これは念台の学の精微深密を証するに足るもので、千古の真血脈であると述べている。(青谿書院全集第二編下、草庵読文、読劉子全書。同第一編、肄業余稿) 故に吉村は王だが我は劉といつて、(林良斎宛書簡) 自らは陽明よりも念台を信奉する旨を明らかにした。念台を奉じて切至な反省的実功を要とした草庵が、張南軒の篤敬を尊び、程門、尹和靖の踐履を純篤とし、東林の高景逸の平常の道理に注目し、日常平実上の切至な身心の点検を旨とした明の呉康斎の実功を記した「日録」を高く評価し、「日録」の講説をもって今日の急務としたのも理由のないことではない。その他草庵は良斎と同じく東林の顧涇陽の「小心齋割記」や高景逸の「三時記」「知本説」などを好んだが、(林良斎宛書簡) 草庵が念台の自訟慎独の工夫として、主として求めたものは、一味退蔵、黙然として静修することであったので、(青谿書院全集第一編、鳴鶴相和集、復林良斎書) 草庵は羅豫章・李延平・聶雙江・羅念庵などの主静掃寂、静坐収斂をもって真切なものとし、聶・羅の掃寂説については、これは中庸の旨を発明し、致良知の弊を救うものであると述べた。(林良斎宛書簡) このように静寂を宗としたのでまた胸中の淡泊酒脱を高尚とした。故に楊慈湖の扇訟を高く評価し、(同) 「この中甚だ涼快」といった念台の易簣の語を愛し、(草庵文集中、涼快堂記) 「地罽に芋栗を煨く。貴人をして知らしむるなかれ」という宋末の詩人、真山眠の「田家の詩」の幽趣を好んだので

ある。(肄業余稿統) 草庵も現成派の二王の論はこれを警策として認めるところがあり、殊に竜谿に対しては、「単刀直往、心髓微に入り、言々破的、針々血を見る。学者猛然として警省の念を生ず。余深く竜谿の言に取るあり」といったが、結局自信過剰で後学の弊を貽すといつてこれを斥けた。(草庵読文、読王竜谿集) 草庵が特に念台の慎独説に傾倒したのは、それが中庸に本づき、切にして微に入るところの工夫で、よく程朱陸王を合一したものと考へたからでもある。(楠本端山宛書簡。林良斎宛書簡。草庵読文、読劉子全書) 故にまた朱王を折衷し、宋明を調停して門戸の見を排した。(林良斎宛書簡)

沢瀉も初めは念台の学をもつて朱王を折衷するものとしてこれを好んだが、秋陽に師事して以来王学に転じた。沢瀉は現成派の流弊は感じていたようであるが、(沢瀉全集卷上、証心録下) 秋陽が鄒・欧陽らの修証派を好んで、二王などの現成派を排したのとは異つて、むしろ二王を好みこれに推服した。(沢瀉全集卷下、沢瀉文約、復楠本碩水宛書簡) 同卷上、証心録上) 故に沢瀉が「凡そ学、覚をもつて則となし、人意を顧みず一に自信にあるのみ」(楠本碩水並本正韶、与楠本碩水参照)

幕末の陽明学者は概していえば、帰寂派または修証派に心を寄せて、現成派に対しては批判的であつたが、中には沢瀉のように現成派を好んだものもいる。例えば一斎の門人、奥宮慥斎は竜谿を好み、(高瀬武次郎著、「佐藤一斎と其門人」七四三頁) 一斎の門人、佐久間象山に学んだ吉田松陰は、李卓吾の書を読んで心を打たれたようである。(松陰全集、年譜) また幕末の陽明学者は前述のように、概していえば朱陸朱王を折衷したが、朱子学者の方は朱子と陸王の別を論じた。中には訥庵のように朱子を純守して陸王を痛斥したものもいた。訥庵と端山・碩水兄弟はともに一斎の門人であるが、両者の朱子学は必ずしも同じではなく、また端山と碩水の間においても「西海の二程」(三島中洲詩句)の評によつても推察されるように、多少異同がないでもなかつた。

訥庵は初めは陸王の体認の学を要とし、それを本にして、清初の孫夏峰・黄梨洲・李二曲と同じく朱王を折衷して明末の陳清瀾の陸王批判を誤りとし、湛門派の馮少墟の王学批判をもつて公平を失すると述べ、清初の朱子学者、呂晚村、陸稼書の排陸王論を非としたが、その後念台に転じ、やがて朱子学に移り、遂には陸王禅学及び洋学を異端と

して鋭くこれを弁じ、闢邪の旗幟を高く掲げた。訥庵の弁析の鋭鋒は陳清瀾を偲ばせるものがあつた。しかし概して
いえば訥庵の朱子学は、呂晚村・陸稼書に近いであろう。(拙著「楠本端山」参照)

端山・碩水ともに存養をもって致知力行を貫くとした山崎闇斎の朱子学に従い、居敬を学の終始、窮理の本として
切に体認自得を旨とした。「楠本端山」。楠本端山、池田草庵宛書簡。楠本碩水、池田草庵宛書簡。碩水遺書五、
贈内田仲準。同、贈秋山罷斎。同九、隨得録二)端山は、朱子が本領一段の工夫とした居敬涵養を提げてこれを切論
したが、端山によれば、本領一段の工夫とは、心を常に軀殼内に収める工夫で、整齐嚴肅、常惺々、心を収斂して心
中に一物も容れぬという、いわゆる朱子の居敬三条を内に含むが、心の収斂が主であると。即ち心を収斂して放心を
収めるのが本領一段の工夫であつた。これによって道の本源が明らかになれば、世事は刃を迎えて解けると端山は述
べている。この工夫も端山にあつては、高景逸の深い静坐体認の学を通過し、周・羅(豫章)・李・陳・羅(念庵)
などの主静帰寂を受用して後到達し得たものであるが静坐による仁体深智の自得体認は、端山の学問の宗旨頭脳であ
つた。端山の深潜縝密な静坐体認は、当時の朱王学者の追隨を許さなかつた。端山は晩年智蔵の微旨を明らかにし、
「智蔵の述なきは冬収の至寂、声もなく臭もなき全体にして活発々地」と述べている。(「楠本端山」参照)

碩水は、

明儒の書、警策の語は随分面白御座候得共、理到之処絶而無之様被相考候。布帛之文、菽粟之味は程朱に限り候事
に奉存候(池田草庵宛書簡)

と述べ、また「平々常々、その内ニ無窮之妙処有之候様奉存候」(同)と述べて、程朱を奉じ日常平実の身心上の工
夫を切要として心の自得を責めた。碩水は学問は染み入ることが大切だという。(同)これによって如何に自得を重
要視したかを知ることができよう。故に碩水が「心経付註」「夜寐箴」「敬斎箴」において或いは尊徳性の一路に、
或いは持敬の法に益を得たといひ、「今日善く康斎を学ぶ、幾人かある」といって呉康斎の学を推賞したのも理由が
ないわけではない。しかし碩水の朱子学はまた清初の陸稼書や張楊園の朱子学に近いところがあつたと見え、「陸稼
書は正大、張楊園は精粹」といって、この二人を称賛している。(碩水遺書八、隨得録一)故に碩水が、当時流行し
ていた念台の学に批判的であり、(碩水遺書一一、隨得録四)顧涇陽・高景逸・馮少墟・黄梨洲・李二曲など、王学

の影響がある朱子学者や王学者の学を評して「五子皆未だ醇ならず」（碩水遺書八、随得録一）といったのも無理からぬことであろう。碩水の朱子学で忘れてはならぬ一事は、「異姓を冒さざるはこれ孝の第一義、武門に仕へざるはこれ忠の第一義」（同）というように、名分の要を切論したことである。これは崎門派の流風によるものであろう。（楠本端山、碩水宛書簡。家庭余聞等参照）